

第39回 日文研フォーラム

■

# インドは日本から遠い国か？

—第二次大戦後の国際情勢と日本のインド観の変遷—

Is India Too Far From Japan ?

—Japan's Perception of India in the Changing Postwar International Environment—

■

サウイトリ・ウィシュワナタン

Savitri Vishwanathan

---

国際日本文化研究センター



日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 梅原 猛



● テーマ ●

## インドは日本から遠い国か？

— 第二次大戦後の国際情勢と日本のインド観の変遷 —

Is India Too Far From Japan?

— Japan's Perception of India in the Changing Postwar International Environment —

● 発表者 ●

サウイトリ・ウィシュワナタン

Savitri Vishwanathan



## 発表者紹介

サウィトリ・ウィシュワナタン  
Savitri Vishwanathan  
デリー大学教授

1934年生まれ。1960年、デリー大学より修士号取得(政治学専攻)。1970年、ジャワハルラル・ネール大学より博士号取得(論文：1945-1963の日ソ関係)。1969年よりデリー大学講師、助教授を経て、1985年よりデリー大学日本中国学科教授(日本研究)。その間、1981-84年、および1985-87年、デリー大学日本中国学科長を勤めた。1991年6月より1992年5月まで、国際日本文化研究センターの客員教授として来日。専門は日本政治・外交史。目下、政治思想史-田中正造について、また、外交史-80年代の日ソ関係についての研究を進めている。

1966-68年、文部省のグラントで東京外国語大学で研修。1974年、東京大学で研究。日本の公害問題にたいする市民運動について、富士市のケーススタディを纏めた。1980年、日印比較研究としてインドにおける日本の投資の問題を、1981年には東京の国連大学でインドにたいする日本の工業技術輸出の問題を研究。

また、1967年に日本ユネスコ協会明治百周年記念論文コンテストで内閣総理大臣賞を受賞。「日本の権威主義にたいする自由民権運動」と題したこの論文は中央公論誌(1968年2月号)に記載、発表された。1982年、インドにおける日本研究の振興と日印両国間の国際理解推進の功績により、日本政府よりインド人として戦後最初の叙勲、勲四等宝冠章を受賞。

1978年より、80年、82年、84年に開催された日印外相会議や首脳会談に協力、大きな貢献をしている。国際学会やシンポジウムでの発表多数。

主な著作：

Normalization of Japanese-Soviet Relations, 1945-1970, Diplomatic Press, Florida, USA, 1973.

Japan, National Book Trust of India, New Delhi, India, 1976.

Modernization and Stress in Japan, (Co-author in T. Fuse ed.), E.R. Brill, Leiden, Holland, 1975.

Japan: the New Challenges, (Ed. and contributed), Allied Publishers, New Delhi, India, 1982.

Contemporary Japanese Politics and Foreign Policy, (Co-author in K.V. Kesavan ed.), New Delhi, India, 1989.

などをふくむ9冊の英語の著作に加えて、「永遠の日本」(1975)、「環境の思想を求めて」(1978)、「アジアの女-アジアの顔」(山崎朋子と共著、1985)など、日本語の共著も多い。また、専門の日印政治や外交史、国際関係の分野の他に、日印比較研究、環境問題や女性問題にかんする多数の論文(日本語及び英語)を日印両国で発表している。

皆様こんにちは。きょうのテーマは「インドは日本から遠い国か」です。このテーマは幅広く話せますが、今日は第二次大戦後の国際情勢と日本のインド観の変貌に焦点をおいて、お話をさせていただきます。というのも、日本とインドの政治・経済関係を中心として話したいと思うからです。

皆様もご存知のように、戦後インドが日本と国交を結んで以来、四〇年になります。インドが戦後日本と国交を結んだ最初のアジアの国だったということも忘れてはなりません。一九五一年九月に署名され、一九五二年四月に批准されたサンフランシスコ条約によって、日本は主権を持つ国になりましたが、アジアの他の諸国はその条約に署名したにも関わらず、批准が賠償問題と絡んでいたことで国交が正常化されなかったのです。

私は先ほど、あえてアジア諸国の中にインドもあると申しましたが、日本ではアジアという場合に、インドが含まれていないように思われます。もちろん日本が地理的条件にもかかわらず、自国をアジアの一国として認識するよりも、西洋の一員、即ち、G7の一国だという認識が強いからです。最近の日米関係の再検討に関連して言われる様になっているのは日本がG7の一員でありながらアジアの一国でもあるということです。アメリカのグローバル・パートナー役を勤める

とき、日本はアメリカにもアジアの諸国の見方を重視するように働きかけ、またアジアにおける日本という立場を理解させる必要があると主張されるようになりました。これは歓迎すべきことです。しかしアジア・太平洋という観念にもインドというか、インド亜大陸の諸国も含まれているかどうか疑問を持ちます。日本でアジアという場合は東南アジアのビルマ（現在はミャンマー）まで入るそうです。また、アジア・太平洋というときには、中国、ロシア、オーストラリア、ニュージーランド、もちろん北アメリカ等も入っているのですが、そこにもインド亜大陸の諸国は入っていません。だからこそ、インドは日本にとって遠い国になったのだろうか、と問いかけたくなるわけです。

戦後の日本とインドの関係は、先ほども申しあげたように、東南アジア諸国とは違った出発点だった訳です。その原因は何だったのでしょうか？

(一) 戦争中、日本の軍隊はインドの土を踏まなかったのです。インドの領土として日本軍隊が入ったのは南のアンドマン・ニコバル群島だけで、そこで ANA  
DHINDGOVERNMENT (独立インド政府) が日本の手を借りて設立されたわ



けです。というのは、スバシユ・チャンドラ・ボースの指導で設立されたインド国民軍が日本軍の力でインドの独立をかち取ろうとねらっていたし、インド国民軍と日本軍との関係も東南アジア諸国で設立された解放軍との関係とは本質的に違っていました。インド国民軍はインド人の司令官の下でインドの独立戦争をしているつもりだったので、日本軍と他のアジア諸国の解放軍との対立には日本側を助けようともしなかった訳です。逆にチャンドラ・ボースは日本の司令官に、インド国民軍が他のアジア諸国の民族を弾圧する事に利用されないようにはっきり伝えておいた、と云われています。もちろん、インドでネール派がチャンドラ・ボースの日本と手を結ぶ計画に同意しなかっただけではなく、積極的に反対もしました。戦後イギリスが、日本軍と協力したインド国民軍を反逆者とした裁判に、ネールが国民軍側の弁護士となったし、日本軍の藤原岩一を始め日本人がインドの弁護士の力になってくれました。

- (二) インドの独立後、ネールは日本の占領軍に属していたインド人の軍隊を、インド人はアジアの一国の占領軍に参加出来ないという理由で撤退させました。
- (三) 一九四七年、アジア大会がデリーで開かれたとき、占領下にあった日本も招

待されました。

(四)東京裁判にインドのラダビノデ・パール判事は連合国側の大勢に対抗して、「日本無罪論」を主張しました。パール判事は日本の戦争指導者に対する個人的責任の追求が国際法的根拠を欠くものだと主張しました。

(五)一九四九年、ネール首相が日本の子供のために象を寄贈しました。

(六)一九五一年、ニューデリーで開催されたアジア競技大会に参加するように日本に招待状を出しました。

インドはサンフランシスコ会議への招請を色々な理由で拒絶しましたが、先ほども申し上げた様に、終戦後早々、一九五二年六月九日に日本と平等的友好的な条約を結んだ最初の国でもありました。インドとしては、日本が国際社会の一員として活躍する日が一日も早く来るように望んでいたからです。そして日本の国連加盟を一貫して支持してきました。

インドは一九五五年バンドンで行われたアジア・アフリカ会議に日本の参加を歓迎しました。その後、日印関係は今日まで友好的に続いています。それにも拘

らず、日本がインドから遠ざかっているような気がするのとはなぜでしょうか？それはこの二国間の関係によるものではなく、国際情勢の移り変わりによるものではないでしょうか？

戦後世界が二つの陣営に分かれたとき、日本は自由陣営というか、アメリカ側に寄ることを決心したし、インドは非同盟主義を選択した訳です。その上、インドが積極的に反植民地主義、反帝国主義を唱えて発展途上国側に立ち、指導する役割を担ったことも間違いはありません。また、インドは社会主義型経済発展に憧れを感じ、アメリカ及び日本と対照的に反共産主義の立場を取らなかったのです。また、インドは中国の国連加盟を支持し続けました。このようにインドは二つの陣営のいずれにも属さないで独自の道を選んだのですが、イデオロギーの上では、ソ連に片寄るように見えたわけです。インドは、国際社会に反植民地、反帝国主義、また反新植民主義に反対する痛烈な声をあげていた訳です。またインドは、ソ連との関係が密接になる一方で、ソ連が東ヨーロッパ諸国を植民地的に取り扱うことに怒りを感じたり、抗議したりすることを遠慮したことに対して日本は懸念を感じ始めました。共産主義の道を歩こうとしなくても、ソ連の立場

を国際社会で支持したように見えたのです。

一九六二年の中印国境紛争の勃発は日本の対インド観に大きな影響を与えました。ネールの日本への訴えに対して、池田首相はインドが当面している難しい問題に同情していると云いながらも、問題の平和的解決に日本の支持があると伝えただけでした。インドの立場に同情的援助を約束したアメリカは、武力闘争が中止になってから、日本にインドへの援助を増やすように駆り立てました。けれども、日本は応じなかったのです。中ソ対立によってソ連がインドとの関係を密接にしてしまったことで、インドはソ連と手を組んで中国包囲政策をはかっている。日本は解釈し、そこで日本のインドにたいする見方が誤ってしまった、と云ってもよいでしょう。

この経緯からも分かるように、日本とインド両国とも、お互いにそれぞれの政策の微妙な差異を理解しえなかったのです。インドは、アメリカの中国包囲政策に日本が積極的協力したと判断し、中国との関係が悪化したときには、アメリカと同じ反応をすと思ったし、日本が中国との対話の道を開くことにどれほど熱心だったかということにまで思い至らなかったのです。また、この時期に日本は

中国が核兵器保有国になっていることに対してアメリカが懸念を持つことを考えなかったし、日本の中国政策についてアメリカと相談する必要性も感じなかったでしょう。要するに、アメリカの反共産主義政策とほとんど同調しているように見えた日本が中国を別扱いしていたことを、インドには理解出来なかったのです。中国が核兵器保有国になったことには冷静だった日本は、インドが十年後に行った平和利用の為の核実験に対して激しい反応を示しました。日本はインドへの援助を増加しなかったし、またインドに対する国連主催の石油危機を克服するためのプログラムにも参加しない態度をはっきり示したのです。

インドと中国の関係が悪化したことによって、と云うか、中国のパキスタンよりの政策、アメリカの中国と国交正常化の努力が進むことにパキスタンを利用することなどで、日本のインドに対する冷たい関係が続く、東パキスタン問題が紛糾するにつれて、インドはソ連寄り政策を強めました。これもまた、日本の反感を買った訳です。

東パキスタンの状態が悪化したことによって起こった難民問題に関して、インドが日本の協力を要請したときも、日本は「国連の重要な役割が幾多の困難をも

たらずでありましょうが、大国として高度な自制を示し、あくまで平和裡に話し合いによって解決する」ように助言しただけでした。地勢上、インドが抱えるさまざまな問題の複雑さ、また、多様性を保ちながら統一を固めてゆく課程のもどかしさを、日本は十分理解し同情を示したといえるでしょうか。インドのソ連寄り政策、また、インドが南アジアで大国として振り回しているような姿しか、日本には思い浮かばなかったのかもしれない。

東南アジア諸国との関係にも、日本の政策はインドと相入れなかった訳です。日本はアメリカが訴えたドミノ理論に同意し、世界を共産主義から守ることがアメリカの使命だと信じていたし、そのため武力を振るうことも正義だと思い、日本は直接武力援助をしなかったとしても、アメリカの東南アジアにおけるこの政策を全面的に支持して来たと云えるでしょう。それと対照的にインドはベトナムを一貫して支持しました。東南アジアの他の共産主義諸国とも国交を結んでいたわけです。

要するに、アメリカとともにソ連を世界の秩序を乱す敵国と見ていた日本と、

友好国として見ていたインドの立場が相入れなかったことは云うまでもありません。それにも拘らず、インドと日本の経済関係は発展しました。戦争直後バータ形式貿易で綿花がインドから輸出されるようになったのが日本の繊維産業の復興に役立ち、そして日本産業発展にもなつて鉄鋼石が必要な輸入品になりました。

一九六〇年の後半、インドも日本の資源外交的になりました。アジアの経済発展を手助けすることによって、アジアを共産主義から守ろうという概念が吉田時代にも打ち出されました。しかし、一九五四年に日本はアメリカにアジア・マーシャル・プランを提案しましたが、アメリカの支持を得ることが出来なかったのです。それにも拘らず、一九五七年、岸首相がアジア諸国を訪問した時、アジア開発基金の設立を提案されたが、その反共産主義的狙いを懸念したインドは、その案に興味を示さなかつた訳です。しかし同じ年に（一九五七年）ネールは日本を訪問し、インドの経済発展に対する日本の援助を頼みました。したがってアジア開発基金についてインドが遠慮したのは、日本がその提案者だったからではなく、その案がはらんでいた反共産主義活動を強いられるのではないか、という懸念を持ったからでしょう。一九五八年に日本は、インドを援助するコンソーシアムを通して有償資金協力を始め、五千万ドルを供与しました。その後インドと円

借款協定が次から次に結ばれ、一九九〇年度までに約一兆一五八億円を供与しました。従来、電力、肥料工場などを中心に供与されてきましたが、近年供与対象事業の多様化が図られており、はじめて一〇〇〇億円の供与が行われた九〇年度には中小企業育成、植林、医療関係等にも供与されるまでに至っています。しかし、日本とインドの間の経済関係は期待されたほど延びませんでした。日本の国際貿易にインドの割当は一九六〇年に輸出二・七％となり、輸入二・二％だったのが、一九九〇年には、それぞれ〇・六％と〇・八％まで下がりました。一九八九―九〇年には民間ベースの国外投資の〇・〇三％しかなかったし、一九九〇年までの累積投資も日本の国外累積投資の〇・〇七％だけだったのです。

最近インドで導入された、貿易外国投資などに関する自由化制度も、余り効果をもたらしているように見えません。インドとの貿易やインドでの投資は、日本にとって必ずしも有利であるように受け取られていません。その理由として挙げられるのは次のようです。

(一) 低賃金制度の利点は低い生産性によってなくなる。

(二) インドは合弁会社の全生産を輸出へ回すことによって利益を得ることに



期待をもつが、国内市場を確立しないと不可能。

(三) インド政府が今の政策をずっと続けるという保証はない。

(四) インドではインフラがまだ整っていない。

(五) インドで日本人が慣れている良い生活様式ができるような条件は揃っていない。何よりも社会秩序が悪く、外国人の誘拐事件がよくある。

(六) インドでは特許権使用料は高くないが、税金が高い。

以上のようなインドにおける悪い条件は今急に云われだしたものではなく、七〇年代にも同論が唱えられていました。また、このような悪条件は日本だけが直面するようになっていいるのではなく、日本にとつて、インドが相対的に低いプライオリティの国だと考えてもよいでしょう。一九七二年にインドへ派遣された日本財界使節団のレポートはインドの産業のあらゆる部門を精密に分析しています。高く評価された部分もあれば、病理が並べられたところもありました。結論としてはインドを東南アジア諸国と同じ扱いに出来ないということが述べられています。また財界がインドに興味をもつように刺激するため、外務省がインドに対

してもっと積極的になる必要性を訴えていることも、この報告書から読みとることが出来ます。もちろん、一九七二年は日本にとって中国との正常化の年でもあり、その後も東南アジアの次に中国との経済協力に日本は積極的になったので、インドには魅力を感じなかったことはいうまでもありません。財界に対して政府が圧力をかけることが出来ないから、インドが日本財界に魅力のある国になるようにという議論をよく耳にするわけです。また、インドは自助努力すべき国なのに、それを十分はたしていない、ということもよく言われます。この発想では、インドが抱えている問題は全部自助努力の不足で片付けようとすることになるわけです。しかし、実際には日本のインド観はある意味での疎外観から生じるのではないかと思えます。

先ほども申し上げましたように、この疎外観が生まれたのは、世界の国々が米ソ対立を基本として二国間の関係を定めていた、という現象があったからでしょう。冷戦が終わった今日、そのような霧も去り、太陽がきれいな光を照らすようになって来たと思えます。その光の中でインドは、日本にとってどのように見えるのでしょうか。それではインドのプラスの面を並べてみましょう。

- (一) 東西南北でも三〇〇〇キロ、海洋線七〇〇〇キロという広がりのある国。
- (二) 自然界に豊かな多様性のある国。
- (三) 公用語は一五言語で多様な民族と宗教が共存している国。
- (四) 文化の多様性に誇りを持っている国。
- (五) 独立後四〇年間も統一を守っている国。
- (六) 議会政治を維持し続けており、有権者は五億人で、投票率は六〇%もある国。
- (七) しっかりと官僚機構をもっている国。
- (八) 政治的野心のまったくない軍隊で、シビリアン・コントロールが徹底している国。クーデターが起きたことは一度もなく、その可能性もないと思われる。
- (九) 膨大な知識階級層があり、老成した知的風土のある国。

南アジアの安定はインドの国内安定なくしては不可能です。インドが南アジアの安定の鍵を握っていることは日本でも認められています。インドに対して抱く日本の懸念は、インドの軍拡であるかも知れません。広大な国土、長い海岸線、

膨大な人口、多様性のある文化、複雑な社会構造を持つインドとしては、国の統一を保つ為にも強い軍隊が必要になるわけです。インドの軍事費用はGNPの二%ぐらいで、この三年間、軍事費は物価上昇に応じて増えていません。今年の予算に含まれている軍事費の四%増加は一〇%の物価暴騰に較べれば少ないものです。

先に申し上げましたように、インドと中国の関係も、日本のインド観が影響したと云えます。最近の中国首相のインド訪問の際に出された共同宣言にも見られるように、国境問題を棚上げにして、さまざまな分野で関係改善を図ることになっています。中国が非同盟諸国への接近を図っており、今インドと中国の関係が日印関係の障害になることはありません。

いままで述べて来たようないろいろな問題にも拘らず、日本がインドを数字の上で評価しようとするならば、今後も日本のインド観は変わらないでしょう。というのも鈴木善幸前首相の言葉を借りれば、日本は一割国家だとはつきりいえます。すなわち、世界のGNPの一割を持つ国。もっと身近な数字を挙げると、

一九八八年の日本のGNPは、アジアの諸国（中国とインドを含む）、その上オーストラリア、ニュージーランドも入れて、これらの合計の六六％にも当たる訳です。先ほども申し上げましたように、インドは日本から見ると投資の面でも貿易の面でも、一割というか一パーセントの価値もない国です。しかし今、日本が問われているのは、数字の尺度でものを考えることを止めることではないでしょうか？ また日本はもう世界の中で一役者であるだけではなく、アメリカとのグローバル・パートナーシップに結ばれて、グローバルな秩序を守るための重要な役を演じるように期待されているのではないのでしょうか？ この時点で日本はこれから進む方向をはっきり指摘するように問われているのではないのでしょうか？

インドとしても、今まで東南アジア諸国のような「ルック・イースト」政策を積極的に考えていたとは云えません。投資の面でも日本を優先する立場を取って来たともいえません。しかしインドでは最近、超党派的に日本との関係を密接にしようという声が出て来ました。「ルック・イースト」というスローガンが盛んに唱えられるようにもなりました。インドでは日本の地位が国際政治上さらに高くなることを歓迎するという意見もでてきます。国際機関でインドの理事や代表が

日本に協力しています。インドは国際社会の中で政治的に孤立してはおりません。経済的には孤立しているのかも知れませんが。インドだけではなく南アジア諸国、またアフリカの諸国が先進国の経済新秩序政策からはずされていくような気がします。アジア太平洋の概念がうたわれるようになってから、世界は三つのブロック（EC、NAFTA（メキシコも含む）、アジア太平洋）でしか成り立っていないようで、そのあいだの協力や摩擦などばかり論じられるような傾向があります。もちろん旧ソ連の問題が大きな話題になっていることは否めないことです。しかし、南アジアとアフリカは無視されているとまでいえないかも知れませんが、軽視されているような気がするのです。世界経済というか、先進諸国の経済にこの国々が何の貢献もしていないような感覚で議論が進められているような気がしてなりません。もちろん日本はインドを政府開発援助の枠に入れているし、一九九〇年のODAは一〇〇億円台にもなっています。一九八六年から日本はインドへの第一番の援助国でもあります。一九九一年九月にも八三〇万ドルの援助の公約をしています。

最近、インド政府のほうから宣言した自由化政策（外国投資を歓迎することを含む）に対して、必ずしも日本の財界が応じるような雰囲気になっていないこと

は無理もないと思います。というのも日本の財界としては第一にインドの政策が変わらないと確認したのであり、また日本の政策も、いろいろなこと、たとえば、他国との投資の機会の比較、利潤の見込み、投資する妥当な一般の産業の雰囲気などを徹底的に調査した上で決定するから、実施までに時間がかかることでしょう。この点が西洋諸国と日本では違ふところなかも知れませんが、インドは結論を急いではいけないのです。そのかわり、日本は決定したあと実施するのが早いのですから、この利点をインドも承知して、日本が実施しようとする段階でインド側から遅延の問題がないように準備しなければなりません。同時に日本も自国の経験に照らして、ある程度の国内産業の保護の一時的な必要性、また即座に完全な自由化がもたらし得る雇用面の影響等も念頭において、インドの躊躇を理解するべきだと思います。インドの人口は多いのですが、一人当たりの収入は低いのです。だから現在の国内市場は大きくないけれども潜在的な力のある国です。今のところ外貨不足が問題になっており、輸出向け産業の発展に重点をおかなければなりません。日本の企業としても輸出可能の産業に投資する意欲があるかも知れませんが、なぜなら輸出は利益を保証するからです。このように、インドと日本は話し合いを進めながら、お互いに利益のある道を探ることは出来ない

ことではないのです。重要なことは対話を続けること、お互いに固定的なイメージをもたないで、変わりつつある現象に注目することではないでしょうか？

今日、日本は自国の政策がどのような原則に基づいて行われているかを明確にするように問われているのです。今までの場当たりの政策は物足りないと批判もされています。というのは日本が経済大国としてグローバルなリーダーシップを発揮するために原則の面が重要だといわれているのです。これと対照的にインドは余りにも原則に拘りすぎ、実用的ではなかったと言われています。日本とインドはこの意味でもお互いに学びあうことが沢山あるのではないかと思えます。二十一世紀に向かって今日、日本とインドはお互いに無視できない存在だと言えましょう。世界が抱えている開発と環境の重要な問題を解決するためにも、日本とインドは密接な協力をしていかなければなりません。



\*\*\*発表を終えて\*\*\*

第39回日文研フォーラムで発表の日には予想していたよりも多くの人々が来て下さり、大変嬉しく思いました。出席者の一人から記念に、と自作の絵を頂いたのも嬉しい思い出となりました。お忙しい中でコメントーターの労をとって下さった木村汎教授にもお礼を申し上げたいと思います。「インドは遠い国か?」という題で話しましたが、発表のあとで聴衆が「遠くない」と解って下さったのを感じて、嬉しく思いました。例えば、インドと日本の文化交流について、質疑応答の時に、日本がインドから得た文化遺産、インドの文学や思想の日本におよぼした影響など、政治とは離れたところで日本人がインドに対して深い関心を持っていることがよくわかり心強く思いました。かつてネール首相が政治よりも文化が大切だと主張して、インドでは戦後どの国よりも先に日本人留学生を受入れました。この留学生たちが今日、日本で有名なインド学者に育っていることも、嬉しいことです。この日文研フォーラムの日、1月14日はインドの収穫の祭りの日に当たります。この日インドでは採れたての新米に牛乳と黒砂糖をいれたお粥を作り、みんなで食べて収穫を祝います。たっぷり入れた牛乳が溢れ出すと、幸せが溢れるとってみんなで喜びます。この牛乳のように世界中に平和と幸せが溢れることを祈っております。

Savitri Vishwanathan  
28.5.92.



日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORI ßEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがいがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像—現実と幻想—」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡—」

⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元 .4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元 .8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムート O. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に來た中国人」
17	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉓	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉔	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのペーバルス王伝説における主従関係の比較」
28	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
29	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「パロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
31	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
33	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
36	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
38	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・ 日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトロブ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
45	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研 外国人研究員) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④⑥	4.10.13 (1992)	李 栄 九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
47	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン(米国ウェスリアン大学助教授・ 日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考 - 『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」

○は報告書既刊



\*\*\*\*\*

発行日 1993年6月10日  
編集発行 国際日本文化研究センター  
京都市西京区御陵大枝山町3-2  
電話 (075) 335-2048

問合せ先 国際日本文化研究センター  
管理部・研究協力課

\*\*\*\*\*

©1993 国際日本文化研究センター





■ 日時

1992年1月14日

午後2時～4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

